

## 余田さんのこと

川 越 淳 二

十二月八日、余田さんが亡くなつた。六十八才、まだまだ活躍が期待できる年齢だつた。一部新聞では、急性心不全が死因と報ぜられたが、実際には、肺ガンの全身転移で、抗癌剤でボロボロになつた約二ヶ年の闘病生活の末であつた。あまりにも悲しく、口惜しい。葬儀がおわつた頃、私は、同志社大の松本さんをとおして追悼論文を書くように連絡をうけた。ほかに適任者がいる筈だと思ったが、そのときは気も動転していたし、何か使命感にかりたてられた気持でお引受けしてしまつた。ただ後記でのべた事情もあつて、結果としては不充分、不本意なものに終つたことをおわびしたい。

私事にわたるが、私はこの一年間に、余田さんを含めて、三人の親しい友人を失つた。三月に S 氏、十二月の末に U 氏で、S 氏は東洋史、U 氏は日本史の愛知大教授で、一まわりちがいの丑年である。余田さんを含めて、いまでは数少なくなった「大正ッ子」である。私がこの世代に属するために感ずるのかも知れないが、彼らには、人生観、処生観、生活観に、その観念の善悪は別にして、明治生まれ昭和生まれとは異なつた、一つの共通点があるような気がする。

多分、彼らが育った時代がそうさせたのだと思う。昭和初頭から今次大戦勃発までの十年間、それは経済的には貧しく、思想的には弾圧された冬の季節であった。それはのちに否定された一方的なものであつたが、ともかく一つの価値観で裏うちされた時代であり、逸脱がきびしく規制された時代であつた。彼らはこの時期に自我を形成した。大戦中はことの善悪に没批判的に戦争に动员され、青春のすべてと多くの友人の喪失の犠牲のなかに生きのこり、そのためには負つた後めたさと脱力感、飢餓からの脱出のための苦闘、これが殆んどの大正ッ子の体验の最大公約数であろう。こうした時代背景の共同体验の有無は故人を語るばあい重要なファクターになると思う。

余田さんは社会学科の卒業生ではない。履歴書によると、一九三九年に関学の高商部を卒業して、翌四〇年に九大法文学部に進み、五十二年十月に戦時の纏上げ卒業で経済学士となり、すぐ某商社に入社して翻訳に従事したとなつてゐるが、翌五十年十月から、民間人として、中国的北京と张家口に居住し、天津、石家庄、大同、包頭、南京、上海などを旅行している。この旅行の主要目的はもちろん社用であつただろうが、彼は半殖民地状態にある中国人民の生活がどんなに悲惨なものであるかをつぶさに觀察し、被占領国民の無念さを了解されたらしい。これが、彼の、後年の、中国社会への異常とおもえる关心となつてあらわれる。それはともかく、日本に引揚げられたのは四十六年三月で、これは私が北京から引揚げたのと同時期であつた。私たちは期せずして被占領国への引揚者という生活上の困難を経験したわけであるが、もちろんお互に、面識があつたわけではない。私は同年十月、豊橋に新設された愛知大学に就職したが、余田さんが広島大学政経学部専任講師のポストを得た

のは、新制大学が発足した翌年の五十年十月のことであつた。しかも五十四年四月関西学院文学部に転じるまでの四年をらずの間に五篇の論文を「政経論叢(広島大学)」やその他の雑誌に公表している。これはアメリカ的業績主義の風潮が支配的であつた当時として、とくに珍らしいことではないが、研究の焦点は既に、「資本主義と農村」、「農民層の分解の地域性」、瀬戸「内海漁民の階層分解に関する実態調査」などにみられるように、村落にあてられていたことは注目に値する。

余田さんが関学に戻られた頃、文学部では大道安次郎氏を主宰者として「宝塚市」の実証研究が行なわれており、余田さんはその農村地区を分担した。当時を述懐して「その頃は社会学には全く素人であった」という余田さんは一方では五十五年から五十九年までの五年間に十一篇、年間二篇平均の学術論文を書き、他方、わが国の代表的農村社会学の書物を読破していくたらしく。敗戦後十年、「戦争は終つた」といわれ、人々の生活もやや落着きをとり戻した時代であり、余田さん三十歳代の時期であつた。

奇妙な話だが、私は、余田さんを想うとき、旧帝国海軍の「妙高」型重巡洋艦を想いだす。実際、大正生れの男子であれば、ほとんどが、旧海軍の艦艇の名前や形式を覚えていたものだ。戦時に建造された大和や武藏などの戦艦や赤城、加賀などの航空母艦は別として、彼らにとって懐しいのは、戦艦「陸奥」「長門」であり、「妙高」「高雄」級の重巡洋艦であつた。巨体、重装備、広汎な行動半径、高速、まさに余田さんは重巡といつてよい存在であつた。

余田さんが「全く素人であった」農村社会学の分野では、当時、すでに優れた文献があつたが、なかでも家連合を軸とする同族理論

を展開した有賀喜左衛門氏と社会関係の累積を基盤として成立する「精神」の存在を強調する鈴木栄太郎氏の自然村の理論は双峰とみられていた。前者は東北農村の理解に有効であり、後者は畿内農村を把握するための強力な武器であった。まさに両者は戦艦「陸奥」と「長門」に比定されるべき巨峰であった。

畿内農村を研究対象とした余田さんが鈴木理論に傾倒したのは当然であった。しかし余田さんは鈴木理論のたんなる祖述者だけにとどまらなかつた。とくに鈴木理論の用語の不適切さに起因する誤解を解き、いわゆる「むらの精神」の構成要素の根拠を「溝掛かり制」・耕区制・水田の分散占取形態、にもとめた。これは土地とそれを物質的土台として成立する社会関係に共同体の基礎をみいだす大塚久雄氏の見解に依拠したものであるが、水利利用に関する共同労働組織を基底構造とする社会関係の累積構造から村落構造をあきらかにしようと試みたものであり、しかも村落の内部構造を農民層分離の視角からとらえて、ともすれば形態論的と批判されがちの鈴木理論を止揚しようとしたのである。彼がのちに、「社会学評論」一〇〇号で、当時刊行された「鈴木栄太郎著作集」の紹介と鈴木社会学について高い評価をあたえているのは決して故なきことではない。

それはさておき、鈴木理論に触発され、彼自身の緻密な実証研究で裏づけられた「溝掛かり制」の理論は、やがて五十年六月に脱稿し、翌年六月刊行された珠玉の名品「農業村落社会の論理構造」として結実する。こうして「社会学について全く素人だった」余田さんは、わずか数年のうちに、農村社会学者として不動的地位を獲得するのである。ちなみに同書は同年度社会学関係の最高の著書として

て日本社会学会によつて文科系学会連合に推薦された。彼はまたこの著書によつて後年関西学院大より社会学博士の学士を授与されている。

この名著の本論は今更とりあげるまでもないが、私にはとくに「あとがき」が印象ぶかい。といふのは、ここに余田さんの思索と行動の原点があるようにおもえるからである。少し長くなるが全文を引用しておこう。

「村落の問題を農村の実態調査を通して考えながら、早くも數年は過ぎた。この間に農村はかなり変化した。これまで書いてきたものはまとめてみてよいよその感が深い。変らない側面をうき彫りにしたからである。しかし変化する側面に眼をつぶっているわけなく、このような側面を明確にしたいと考えているが、しかし近代化にとって、既に明らかにした点が依然として大きな問題であると考へることには変りがない。調査しながら考へてゆくことは容易なことではなく毎々として進まない。ここ一二年公用と私用の多忙さのためでもあるが、学界の進歩にはあせりを感じることも屢々である。しかし一つの事実を認めながらその意味を考え、理論を構成してゆくことが私に課せられた課題であるように思う。とほとほとしんがりを歩むことが、私の性に合う進み方かも知れないが、私の考察の直接の対象である畿内農村の動きも決して活発なものではないようと思う。……」

余田さんは「村研」の有力メンバーであつたし、熱心な会員であり、しかし第六回の鳴子の大会以後、質問にはよく立つたが、あつた。しかし第六回の鳴子の大会以後、質問にはよく立つたが、自ら報告することはなかつたと思う。その秘密が上述の「あとがき」のなかにかくれているように、私は思う。このころから、彼はいわ

ゆる「国強資下」の農業や農村を直接とりあげようとする一部会員の志向に異和感をもちはじめたのではないだろうか。一つには彼の直接の研究対象である宝塚市の農村部の明治以後の変化に関心が集中すぎたこともあるが、また政府の施策に敏感に反応した一部会員とは関心を共同にすることができなかつたこと、さらに学内での要職、例えば六十四年以降四年間の社会学部長、その間の大学院の新設などによる繁忙なども原因していたかも知れない。学部長時代の卒業生の就職先紹介、大学院での学生指導など、四十年代後半に到達した余田さん的情熱は、三十代に比べて、かなり教育と学生指導に傾斜したようである。研究内容も「明治以降の畿内農村社会史」に限定されると同時に、書くものも資料の範囲をでないモノグラフよりも、科学としての論理を重要視するようになり、用語や概念の使用に神経質なほど厳格になってきた。人あるいは彼を評して保守的とか没イデオロギストといふかも知れないが、後進的なわが国の社会学を先進国なみに引きあげること、大学教育の質的向上など、異なる面で進歩的、先進的であったことを見落してはなるまい。

そのあらわれの一つとして、余田さんが重要な役割を演じた通称「むら研」についてふれておきたい。

主として関西に居住する村落社会研究者の研究団体である「むら研」がスタートしたのは七十五年七月であるが、その準備は約半年前から、余田・後藤・松本・山岡・川越の五名の非関東地区居住の村研会員が中心になって立案された。会設置の主旨はおおむねつぎのとおりである。

(1) 村落研究者の団体としてはすでに「村落社会研究会」があり、二十年の歴史とすぐれた業績をあげている。しかし会員を居住地別

にみると、関西地区居住者が非常に少ない。これは研究者がいないためでなく「村研」にはいる意志をもたないからで、相互協力や意見の交換を望んでいないわけではない。しかも「村研」に入会しないのは何故か。

(2) その理由は、第一に、村研の定例研究会が主として東京で開かれるので（とくに若手研究者は）経済的に出席しがたい。したがってそこで討議され決定される共通課題に主体的にとり組めない。第二に、大会での研究報告は共通課題のほか自由課題でも、研究対象が関東地区以北のものが多く、興味はあるが、知識に乏しく、発言しにくい。第三に、政府の政策に敏感に反応していく村研の研究方向がかりに正しくせよ、関西のむらには関西独特の問題があり、その詳細な研究なしには軽々しく村研の方向に同調できない。例えばこの年の村研の共通課題は「むらの解体」であつたが、関西では、現象的にはともかく、本源的なところでは敵存している。これらをあきらかにすることが関西居住者の責務であり、それによって村落研究のレベルをあげることができる。第四に、これは個人的には却々できないので研究会をつくる必要がある。

(3) 要するに「むら研」は主として関西地区の村落での問題をとり扱う。

(4) 「村研」とは全く別個の研究団体である。

(5) むしろ「村研」がとりこぼし、かつ関西では重要な落穂拾いの研究を中心にする。

(6) 会員は二十名からせいぜい五十名どまりとする。  
などが骨子になっていた。

こうして「むら研」は発足した。今まで二十回の研究会と二

ースの発行を行なつた。そしてこの研究会の中心にはいつも余田さん

がいた。上記の「論理構造」のあと書きを読み返すと、余田さんが「むら研」に格別の関心を抱いていたことがよくわかる。彼は病気になるまで、唯の一度も「むら研」の集会を欠席したことなかった。会合ではひかえ目なりーダーであった。が、彼はそれを非常に楽しんでいたようであつた。その彼が三、四年前から「むら研」の機関誌を発刊したい希望をもち、いくつかの私案を提出し、ほとんど実現の一歩手前までいっていたのに、今回のようなことになってしまった。恐らく残った同志が余田さんの果せなかつた志を貰うことになるだろう。

余田さんはいつでもみずみずしい感覚と好奇心をもつてことにあつていた。縁あって愛知大の学生訪中団と一緒に中国を訪問されながら、わずか八ヶ月で社会学者訪中団の副団長として再度訪中したのち、彼は冗談のようにこういつた。「これからは貯金と中國語が必要になつた」と。貯金はいざ知らず中國語はテレビ講座で学習を開始していくらしい。愛すべき萬年青年余田さん。

「ベットの上でジット天井を眺めています。人間が一生かかるやれる仕事はたいしたものではないと痛感しています。」九月に出したお見舞状への返信ハガキの一節である。

重巡妙高故障のためシンガポールに繫留中、敗戦により昭和二十一年七月二日英海軍の手によりマラッカ海峡にて海没処分。

私の脳裏で絶えず重巡妙高の勇姿と重複してきた余田さんの面影はおそらく私の生涯忘れぬ友としてのこるだろう。まだ書きたいことは山ほどあるが、もう書けない。いまはその安らかな眠りを祈るだけである。

(後記)

本稿の執筆をお受けしたのは十二月の中頃で三ヶ月位余裕があつた。それで一月になってから執筆するつもりでいたところ、本文でふれた故U教授の通夜の席で、運わるく心筋梗塞で倒れ、緊急入院、手術、という経過を経て退院したのが二月一日、しかも資料の大半が研究室にあり、病後の身体で研究室まででかけることができず、自宅で限られた資料をもとに書かざるを得なかつたので、あるいは事実誤認があるのでないかと恐れているが、今回はこれであきらめたい。また事務局には大巾に期限を超過したことについて、つづ込んでお詫びを申しあげます。